



サークル紹介 41 新舞踊の会

日本舞踊はむずかしい、お金がかかる等々、お転婆娘で育った私には縁がないと思っていました。七十路になって、ちょっとしたきっかけで入会、いつの間にか七年が経ち、今は踊りが唯一の楽しみになっています。

会の名称は、小池白寿会舞踊部です。会場は洗足池駅から三分の洗足区民センターで、毎週木曜日午後一時から四時頃まで稽古しています。区老連やその他の大会への出場を目指して頑張っています。月謝は会の助成もあり二千円です。踊りの曲も演歌を中心に易しく、師匠の藤川先生は非常に熱心で優しい方です。

会員は五十代から八十代で皆さん和気あいあい、休憩時間のお茶を飲みながらの雑談もまた楽しい一時です。衣装は和服なら何でも結構。私は長い間タンスに寝ていた若かりし頃の物を着て、若返った気分です。踊っている間は、覚えようという努力がホケ防止につながり、足腰も丈夫になり、姿勢も良くなり、猫背も治りました。いつでも見学はOK、気軽に一度見にいらしてみませんか。

問合せは、090-2933-6390 藤川まで



(小池 渡会)

美しい環境づくり 28

自然と歴史の洗足池



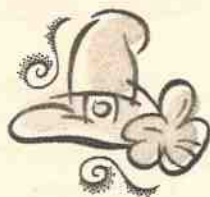
洗足池の池の畔で生まれ育って60数年。我が家の表は中原街道で大変喧しいが、裏の庭伝いは洗足池があり、表と裏では全く風情が違う。

江戸時代には広重の「名所江戸百景」に描かれ、江戸近郊の景勝地として知られていた洗足池。昔は湧水をせき止めた池で灌漑用水として利用され、千束郷の大池と呼ばれた。それが、1282年に日蓮上人が旅の途中で袈裟を松に掛けて休息、池の水で手足を洗ったので洗足池になったようです。昭和3年に池上線が開通し、公園として整備され、同5年に風致地区に指定された。

昭和39年に都立公園となり、その後都から区へ移管。洗足風致協会から区への寄付により、平成2年に大田区立の公園として生まれ変わった。池の外周は約1.2km。高木の針葉樹200本、常緑樹180本、落葉樹640本、低木2500本。自然が少ない都内で、こんな自然環境が揃った場所はあるでしょうか。池自体も名所ですが、その他桜山、勝海舟墓所、弁天島、池月橋、水生植物園等、自然と歴史や文化性の充実した場所は他にはありません。こんな素晴らしい地域で私達は生活しています。美しい環境づくりの為に、

私達はこの自然な環境を大切に守り、貴重な財産を次の世代に受け継ぐことが大切と思います。

(池の台 綱嶋 昭夫)



私の健康法32

メタボって？！

昨年の五月の連休の時、家族旅行の写真を見て驚いた。「すごい、お腹が出ている」

当時、八十kg弱。会社と家の往復。運動もせず、休日はゴロゴロしていた。仕事はコンピュータ関連の事務作業なので、ほとんど座っている。

まずは、家内のやっているママさんバレーの練習に参加することにした。初めは玉拾い。しかし、体育館にいたるだけで、変な汗がドロドロとたくさん出た。ほとんど動けなかった。

それから「歩くこと」にした。通勤時、朝は山手線の一駅、帰りは池上線の二駅、二十分くらい歩くようにした。歩くとき見えてくるものもあり、歩く道を変えた時に

は、五反田や大崎から戸越銀座まで歩いたりもした。最近さらに、少し速めに歩くように心掛けています。

あとは、電車に乗った時、つり革の上の横棒につかまること。これは減量のためではなく、五十肩の防止のため。

このようにして一年、体重は七十二kg程になったが、お腹の皮下脂肪はなかなか落ちないようだ。

(石川台 長谷川 吉隆)



ふれあい 雪谷

平成20年
もみじ号

通巻第72号



S. Shimada



(南雪谷 島田 節さんの作品)

【編集後記】

今年は猛暑、雷雨、ゲリラ豪雨と異常気象に悩まされました。しかし、北京オリンピックでは、水泳・陸上・ソフトボール等で、多くの方に感動と興奮を与えてくれたのではないのでしょうか。

平成二年の創刊以来、編集委員として活躍された直井稔枝さん(東中)が編集委員をお辞めになりました。

長い間お疲れ様でした。

(上池上 田中 紀子)

〔発行〕わがまち大田雪谷地区推進委員会
〔編集〕ふれあい雪谷編集委員会
〔連絡先〕雪谷特別出張所
大田区東雪谷三十一番一
電話 三三二九一五二
〔発行日〕平成二十年十月一日
通巻第七十二号

ホームページ

<http://www.city.ota.tokyo.jp/nishi/yukigaya/index.htm>

この池って一周約1.2キロメートルです。ですから、散歩の目安はおおよそ20分みておいてください。広さは39,281平方メートルですが、この約70年でなんと8,000平方メートルほど小さくなっています。もうこれ以上狭めてはいけません。みんなで景観&環境を護らなければ、と静かに訴えたいのです。

ご存知のとおり、南北からみると、馬蹄形の南の底辺を半円に描いて優雅にくくる「中原街道」がありますね。急坂を誇示しているかのようです。昔、この急勾配に力尽きてダウンする荷馬車や物運びの馬が続出、彼らを弔う祠が今に伝えられてもいるのです。そう、この街道は港区虎の門から神奈川県平塚市にいたる約60キロメートルの道のりなんです。平塚市御殿二丁目あたりに家康が造った徳川家の別荘と宿舎を兼ねた「中原御殿」があって、この名にあやかっの「中原街道」となったようです。当時の主幹線といっても大田区内で面影を残すのは田園調布本町の「桜坂」。整備前は、きっと土ぼこり渦巻く狭〜い道、しかし江戸への物流の幹線でした。「お酢街道」「肥やし街道」など運んだ物品の俗名が物語っています。後に開発された幹線・海沿いの東海道だって狭いものです。吉村昭の作品（1862年横浜市生麦で起きた）「生麦事件」に書かれています。西に行く薩摩藩主、島津久光の大名行列と一列縦隊のイギリス人リチャードソン一行の乗馬がスムーズにすれ違えず、殺傷の重大事件が起きたくらいですから。

1590年、将軍家康が初めて江戸入城を果たす時、平塚からこの中原街道を使っています。きっと駕籠の簾を揚げて、洗足池を左手に望んだことでしょう。そういえば、赤穂浪士の江戸入りも中原街道からですよ。

江戸城といえば、幕末一徳川幕府の終焉、1868年の江戸城無血開城を決めた勝海舟（1823-1899）の別荘・洗足軒の跡が、大森第六中学校の校庭脇にありますね。“洗足池の近くで眠りたい”という遺言で海舟夫妻の墓が建てられたといひます。江戸城をめぐる我が国の歴史絵巻のなかの“点”に、この池の名と地域名が在ったとは・・・

☆

☆

大田区に在住して60年。今春、3期生として大森六中同窓会新発足の時、「大田文化の森」での友人N夫人にお誘いいただいての池畔巡りをガイド。以来“探検したくなって”います。大田区としても「馬・池・洗」＝「MA+SEN」。そうです「馬込」と「池上」そして「洗足」地域をワンステージに観光開発していくことになっているのです。

（小池 沼本 光史）

女性は強し！



人という字はお互いに助け合うという意味がある。夫婦にたとえれば、「ノ」が夫で「メ」が妻だといふ。もし、一方の連れ合いが亡くなると、男は奥さんを失って約2年くらいしかもたないそうだ。

一方、主人をなくした女性は、約18年は長生きするそうだ。夫を亡くして未亡人になった女性が、以前より生き生きと人生を楽しんでいる姿を見ると、いかに女性は強いかと実感する。

マラソンでも女子は高橋尚子、野口みずきがオリンピックで金メダル、有森裕子が銀メダルと男性陣をはるかにしのいでいる。レスリングでも女子は金銀を数多く取っている。

日本人の平均余命は男性が79.19歳、女性が85.99歳と男性よりはるかに長寿である。私が今やっている太極拳でも女性が7割と男性を抜いている。

政界においても、男性は権力欲、名誉欲にとらわれ不正をするのに比べ、女性は精練で生命を大切にしている性格を持っている。政界、財界でも多くの女性が活躍しているが、平和を愛する女性が増えれば、もっと安心できる世の中になるものと実感するこの頃である。

（東中 南 健治郎）



母校の思い出 34

小池小学校第一回卒業

昭和6年、上大崎の第三日野小学校に入学して、その年の遠足が洗足池のチンカラ園、縁あって翌年の夏休みに笹丸へ越して来て、池雪小学校に転入し、通いなれた頃、3年生から分校（現小池小）に行くことになりました。長原駅近くから来ていた人達は、半分の道の程になり楽になったことでしょう。学年ごとに撮る写真には、3年生の時だけ校長先生を真ん中にして、受持ちの先生と音楽の先生が写っています。たまたま音楽の授業がある日だったから入ってくださったのかもしれませんが。教科書には載ってない歌だったかと思いましたが、「スカンポは酸い、つばなの茎甘い、子雉子雉子よ追っかけろ、調練場の原で、とんぼ返ってはねえろ」と気持ちよさそうに歌ってくださったのを今でも思い出します。

4年からまた本校へ。6年になると忙しくなるからと5年で関西へ修学旅行でしたが、私は病気のため不参加でした。6年は進学組とそうでない組とに分けられ（男女組、別々の組が2組づつ）、進学組は遅くまで残って授業を受けていたようです。

卒業間近にまた組分けがありましたが、それは名簿上だけで、組名も受持ちの先生も口頭で言われただけでした。こうして私達は昭和12年3月25日に小池小学校を卒業しました。今でも事情はよく知りませんが、3年生の時に分校へ行った子達が小池小学校の第一回生として名簿上登録されたようです。そのせいか、小池小学校の校舎の記憶はありません。でも、妹達と子供がお世話になりましたので校歌だけは知っています。

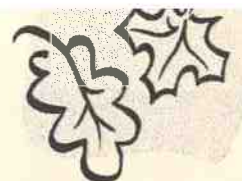
（笹丸 高久 節子）



リレー随筆

雪谷と云う地名の由来

～雪谷のチルド若アユ走る～



古い人間と言われるかもしれないが、私は昭和一桁の雪谷生まれ、雪谷育ちである。したがって、幼少期には呑川や多摩川で遊泳に興じたこともしばしばであった。今は後期高齢者と呼ばれ、疎んじられている。

多摩川のきれいな水は地元の人々の自慢でもあった。それゆえに、川魚の「若あゆ、落ちあゆ」は多摩川の代表魚として江戸人の食通に「多摩川のあゆはなんたって香気、風味は抜群だ」と賞賛をうけ、その名が知られ、江戸城にも献上された。

旬の初物の味は海の「初がつお」川の「若鮎」が人気魚とされ、“サンマは目黒、アユは多摩川”にかぎるなんて云われ、わが町の特産でもあった。その子細は、鮎を雪でまぶし、姿と鮮度をそのままの状態を保ち続けさせ、江戸まで4里、昼夜を若者が「韋駄天走り」に走り、息もつかさず、すっ飛び走って江戸の間屋に納めていた。若鮎にまぶしたという初夏の雪は、谷間の村であった雪谷で、冬の季節に谷あいの△口の中へ雪を大量に取り入れて保存する技法、技術が昔から伝統的に残っていた。その名が雪谷の地名になったと云う。

地名については諸説あり、真偽のほどは定かではないが、どうもこのあたりが定説かとも思う。ふと鮎を運ぶ若い人の幻影がまぶたに浮かんでくる。

“目に青葉、山ほととぎすはしりあゆ”江戸っ子の初がつおをもじったつもりだが、この記述が目につれる季節には「もどりあゆ」がなじむかもしれない。

いずれにしても、現代では若鮎も落ち鮎も「チルド輸送」の宅配便が利用されることでしょ。



（東雪 国府方 忠雄）

